自己主義と利他主義

校　長　小　髙　敏　男

コロナウイルス感染症が5類となり、1年が過ぎました。様々な面で、まだ影響は残っています。感染症防止対策を講じていた4年間で忘れてはならないことは、「自己主義と利他主義」という感覚だと私は考えています。

自己主義と利他主義は、相反する言葉のようであり、あの4年間とどのように関係しているのかピンと来ないかもしれません。自己主義を辞書で調べてみると、「教養を身に付け、自己を常に完成させていこうとする態度。」と小説家のスタンダールの言葉で説明しているものがあります。利己主義とは異なるものです。また、利他主義は、「自己の利益よりも、他者の利益を優先する考え方。利己主義の対概念としてつくられた造語。」と書かれています。自己主義と利他主義、一見、別の言葉のように思えるのですが、感染症防止対策を講じていたあの4年間、どちらも私たちが大切にしていた感覚ではないかと思うのです。

あの頃は、日本中のほとんどの人が不要不急の外出を自粛し、密を避けて感染予防に努めていました。そのような自粛生活を我慢できた原動力の一つには、自分だけでなく、家族や友達など、大切な人たちを守りたいという思いやりの心があったと考えます。感染症に対して恐れを抱いていたからこそ、自他を大事にする「自己主義と利他主義」という感覚を子供たちももっていたと強く感じています。

コロナウイルス感染症拡大以前は、「自己中」と言われて久しい世の中でした。自分のことを優先する行為には悪いイメージがありました。それは今も同じです。学校でも、「自分のことは後にしよう。みんなが待っているよ。」などと声をかけることがあります。もちろん、それ自体は間違っていません。しかし、あの4年間を過ごした現在は、自分と他者を完全に分けて考えるのではなく、自分が感染しないことが身の回りの人を感染させないことにつながるということのように、自分と他者を関係した一体として捉える感覚が大事だと考えます。以前は、このような感覚を学校教育活動の中で子供たちに実感してもらうことは、なかなか難しいことでした。しかし、感染予防の必要性・重要性を強く感じていた時期をへたからこそ、今は実感できるようになったのではないでしょうか。

そして、コロナウイルス感染症が5類になったこれからも、忘れずにもち続けさせたい感覚です。自分が優先したいことの中に他者がいるという感覚、自己犠牲ではなく「自他が生きる」という感覚を、これからの多様性の時代、国際社会が混とんとした時代だからこそ、もち続けなければならないと考えます。

学校教育の体育科「短距離走・リレー」の学習を例にして、この感覚を捉えて直してみます。

自分は走ることに自信がないからとか、チームに貢献できないからなどの理由で意欲的になれない児童がいたとします。その児童が、「チームのために自分に何ができるか」「自分が高まればチームに貢献できる」などと考えて意欲的になることが、自他を生かす学習です。リレーの学習は、走力に差が無いようにチーム分けをして、どのチームにも勝つチャンスがあるようにします。だから、自分が少しでも速く走れるようになれば、それだけチームに貢献することにつながるのです。10秒の子が9秒になったことよりも、15秒の子が13秒になったことの方が、チームへの貢献度は高くなります。

リレーの学習のような自他を生かす学習を通して、子供たちには、自他を比較し劣等感をもつのではなく、共に高め合う関係性を築いてほしいと願っています。